

『北朝鮮に嫁いで四十年 ある脱北日本人妻の手記』

斉藤博子 著 草思社 1,890円(税込)

人として命をかけて生きようとする
膨大な人々の中の、1人の人生

会員 山下 敏雅 (56期)



1997年、北朝鮮からの日本人妻の里帰りが報じられた。当時大学1年生の私は初めて「帰還事業」という言葉を知ったものの、その実態まで詳しく理解してはいなかった。

帰還事業は1959年から1984年まで行われ、9万3340人が日本から北朝鮮へと渡っていった。ほとんどは在日コリアンであったが、6839人は日本国籍保持者で、著者のような「日本人妻」が1831人いた。

著者は、1961年、在日コリアンの夫の家族とともに帰還事業で北朝鮮へ渡っていった。1歳の子どもと離れて日本に残るか、自分が両親と離れて北朝鮮で生きてゆくか——葛藤した末に後者を選んだ著者に待ち受けていた人生は、あまりにも悲惨なものであった。

食糧もライフラインも不十分。日本への里帰りもできない。公開処刑を見ることも強いられる。1991年に夫が結核を患っても、病院には薬もなく診断書の発行しかできない。夫が死亡し、配給もなくなり、日本の家族からの仕送りが途絶え、著者の家族はさらに困窮を極めてゆく。様々な商売や農作業に従事し、時にはヤミ商売に手を出したり畑から農作物を盗んだりしなければならない。中朝国境を往来していた著者の長女は獄中死、次女はヤミ商売を理由に3年間服役、三女は栄養失調で死亡する。著者は、銅線のヤミ商売のために汽車で移動中、隣に全く泣かない赤ん坊を抱いた女性を見かける。その女性と共に警察に取り調べを受けた著者は、赤ん坊がすでに死んでいたこと、そしてその子の腹の中に銅線が隠されていたことを知る…。

普段、陳述書や供述調書で5W1Hの整った文章に慣れている私たち弁護士は、40年あまり日本語から遠ざかっていた著者の連ねる文章に戸惑うかもしれない。本書には、「私は嬉しかった」という直接的な表現が幾度も現れる。北朝鮮での厳しい環境の中でもなお「嬉しかった」ことを見だしながら生きる著者であるが、「嬉しかった」という記載の数は、北朝鮮に渡る前と比べて渡った後の部分では次第に減ってゆき、2001年8月に40年ぶりに日本に帰国して以降の部分にはほぼなくなってしまふ。脱北ブローカーに翻弄され続けた著者は、2009年、日本で懲役1年執行猶予3年の有罪判決を受けることになってしまうのである（その理由についてはぜひ本書をお読みいただきたい）。

現在、韓国にいる脱北者は2万人を超えた。日本にいる脱北者（そのほとんどがかつて帰還事業で日本から北朝鮮に渡った人とその家族）は約180人程度と言われている。これらの数だけでなく、脱北に失敗し、命を落とした人々、北朝鮮の刑務所や強制収容所へ送られた人々、脱北こそしたものの人身売買や売春強要の被害に遭う人々、脱北が非合法とされる中国内で身を潜めている人々、それらも加えれば膨大な数になる。本書は、それらの膨大な人々の中の、たった1人の人生のものである。しかし、その1人の人生を通して、「人が人として命をかけて生きようとしているときに、日本に暮らす私たちが伴走できる社会とは何か」、そのことを深く考えさせられる一冊である。